

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

＜書評と紹介＞ 酒井耕造著 『近世会津の村と社会 : 地域の暮らしと医療』

著者	中村 芙美子
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	69
ページ	81-85
発行年	2008-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10876

書評と紹介

酒井耕造著

『近世会津の村と社会―地域の暮らしと医療―』

中村美美子

本書の著者酒井耕造氏は、福島県会津若松市に生まれ、法政大学大学院修士・博士課程で学んだ後、一九九一年、福島県立博物館の学芸課に奉職され、学芸員として展示や各種講座・調査などに活躍される一方、会津の近世村落や医療などに関する研究を続けて来られた。ところが、二〇〇四年五月一日、惜しくも享年四六歳の若さで不帰の人となってしまう。従って本書は、没後に、博物館の方々を中心に大学関係の方々も加わってまとめられた氏の遺稿集である。

さて、本書の構成は、以下の如くである。

刊行の辞

(法政大学文学部教授 澤登寛聡)

本書の構成

(福島県立博物館長 高橋 充)

第一部 博物館の現場から―地域と資料への想い

一 古文書の読み方 Q & A

二 古文書をどう保存するか

三 教育普及図書『ふくしまの古文書』

四 「はんこ」と花押

五 老百姓と百姓代は同じですか？

書評と紹介

- 六 文献にみる地震
- 七 企画展「げんき・病・元氣」
- 八 企画展「生の中の死」
- 九 企画展「戊辰戦争といま」

第二部 研究の原点―近世会津の村の組織と諸集団

一 郡・荘・郷と組

二 郷頭制と地域秩序

三 「郷頭家」と郷頭役

四 禿百姓と諸集団

五 肝煎と惣百姓

六 肝煎・地首と老百姓

七 兼帯名主の村支配

第三部 研究の軌跡―村をめぐる習俗と医療

一 甲斐国都留郡下吉田村の流鏑馬祭礼

二 会津の頼母子講

三 富士山北麓の薬園と山論

四 会津藩における種痘の普及と民俗

五 戦国の城のゆくえ

六 南山御蔵入領の戦国旧臣と農民

初出一覧

酒井耕造さんの足跡

道標

(酒井恭子)

本書は三部構成になっており、第一部には、博物館の展示や講座などに関連して一般向けに書かれた文章が収録されている。い

ずれも短文であるが、一・二・三は、古文書に関して一般向けに書かれたもので、解説のための心得やコツ、保存の原則などがわかりやすく述べられている。四は花押に関して、その種類や例、使われ方などを解説。五は、「老百姓と百姓代は同じですか」という問を設定して、「老百姓は惣百姓を代表する者であり、百姓代にない老百姓もいた」との解答を出されている。

六では、会津地域に甚大な被害をもたらした「慶長の大地震」を例に、「古記録」に関する問題を取り上げられている。七は、企画展「げんき・病・元氣」の趣旨や内容の説明。八では、企画展「生の中の死」が、人間の、生と死に対して持つ意識の変遷を描き出すことを目的としていると説明。九では、企画展「戊辰戦争といま」の目的が、福島県内における戊辰戦争を出来る限り正確に描き出すと共に、近代・現代の会津と戊辰戦争との関わりを描き出すことにあるとされている。

第二部には、大学院時代からの研究テーマであった会津の近世村落に関する論文が収録されているが、特に一・二・三の論文は、いずれも著者の研究の出発点となった「郷頭」に関するものである。郷頭とは、数か村・数十か村をまとめて組織された「組」におかれたもので、一般には大庄屋とよばれているものである。

一では、この近世会津に特徴的な地方支配の枠組である「郷頭制」の全体像を理解するため、従来から村をこえた枠組みとして存在した荘・郷と、郷頭（＝組）との関係を究明し、郷頭（＝組）は、単独ではなく、郷単位に組織・活動しており、郡奉行の支配をうけていたことを示唆されている。

二では近世前期の郷頭制について以下のことを指摘。

①郷頭の呼称が、「政所」→「大割元・大肝煎」→「組頭」→「郷頭」と変遷するのに伴って、その性格も変化した、ことに、「大割元・大肝煎」から「組頭」への移行は、庄（郷）から組への支配地域の分割・管理範囲の細分化が前提となっていたこと。

②近世初期に導入してきた各領主は、共に、郷頭の持つ戦国期以来の権力を利用せずには民衆支配を貫徹できなかったが、その後次第に郷頭の有した「小領主」としての特権は払拭され、「給分」を与えられる百姓身分の範疇に組み込まれていくこと。

③「組」の頂点にある郷頭は、他の組の郷頭との間で「郷頭連合」を組織し、個々の郷頭が組内で強大な力を発揮できるようにすると共に、一方、組内においては、郷頭段階での内済機能の保持にみられるように、百姓との間に固有の結合関係を結んでいたこと。

三では、近世前期の郷頭家が、その後も郷頭役を保持していくために、どのように変容していったのかという点について考察され、郷頭が自らの基盤の維持のために結んだ「郷頭連合」は、検断（町または宿ごとに設定されている町役人のこと）をも含めた「検断・郷頭連合」の一類型であったこと、又、「検断・郷頭連合」のひとつの類型として、「親類共」という擬制的血縁関係による連合体の存在があったこと、さらに、郷頭家は身分的に閉じられた存在ではなく、他の階層の百姓をも受け入れるという開放的性格をもっていたため、個々の郷頭家の権威だけでは組内の百姓に対して十分に對抗しきれず、そのために郷頭連合が必要であったことなどを指摘されており、さらに、「郷頭家」と「郷頭役」が分

離した場合の相続についても言及されている。

四では、村の持つ二つの性格、つまり、自立的性格（自治）と他律的性格（支配）が不可分の関係にあることを念頭に置いた上で、第一節では、村落内に存在している多種多様な集団の検出につとめ、その中には、「百姓中ヶ間」・「親類・縁者」・「ゆい」「無尽」・「氏子共」などというような、支配の指揮系統に属さない自立的性格をもつ集団が存在している事を指摘されている。そして、これらの自立的な集団は、支配の指揮系統に属す他律的集団よりも、個々の百姓に近い位層に存在しているため、村内で何らかの問題が発生した場合には、百姓は、まず、そうした自立的性格をもつ集団と接触し、領主にとっては非公認の私的な世界において解決をはかろうとした、とされる。また、第二節では、禿百姓をめぐる問題を取り上げて、元来、支配機構としての村の構成員である惣百姓は、自立的性格をもつ村落内の諸集団が保持していた権利を吸収し、惣百姓という集団を村落内において第一義的なものにしようという志向性をもっていたとされている。

五では、近世前期、新たに他村から入ってきた肝煎と惣百姓の間に発生した村方出入を素材として、百姓の意識の変化や肝煎役成立の条件などについて検討を加えられ、惣百姓は他村から入ってきた肝煎に対し、はじめ「要求」を出す形をとっていたのだが、その後は非分を「訴願」する形をとるようになり、さらに対決の姿勢を明確にしていくが、これに対し肝煎側は、当初、既得権を有することや郷頭・代官の承認を得ていることを理由に対抗していたが、その後方策を転換して、村内に自身の血縁関係にある者

を増加させ、その新百姓化を図ることによって対抗しようとしたとされ、結局、肝煎役成立のためには、領主の公認や田畑の多さだけでなく、村内の集団とバランスのとれた関係にある自らの集団を持つ必要があったと結論づけられている。

六では、「老百姓」について以下のことを指摘されている。

① 一般に近世の村々では、いわゆる村方三役（名主・肝煎、組頭・地首、百姓代）が中心となって村政を運営していたが、会津の村々には彼等の他に、「老百姓」「長百姓」「年寄」といった肩書をもつ百姓が存在した。

② 彼等は全員が公的な村役人としての百姓代となるのではなく、老百姓と百姓代が共存していた事例もあり、又、一人の者が老百姓と地首を行き来する場合もあった。

③ 肝煎は百姓の意志とは無関係に領主に任命された者で、百姓や村の成立のために努力はするが、反面、その職務を維持するためには惣百姓の助成を必要とする存在であり、また、村内出入の内済過程で果たす役割からみても、村内で強力な立場を確保できてはおらず、村政の中心を担ったのは、「地首―老百姓体制」とでもいうべき地首・老百姓達で、その中には惣百姓を代表していると思われるような者も存在した。

七では、会津の南山御蔵入領南西地域にみられる兼帯名主にについて検討されている。その結果、兼帯名主の支配村数とその地域は変化し、名主が困窮するなど不安定な要素も見受けられ、当地域における兼帯名主は絶対的な存在であったとはいいがたく、また、兼帯名主と支配下村々との間には、名主を勤めるという負担

と、それへの保証という関係がなりたつていた、とされている。

第三部には、会津の村に限定せずに、近世村落の様々な側面に光をあてた諸論文が収録されている。

一では、近世の村落研究において、社寺を村社会の中に積極的
に位置づけていくことは、諸関係に基づく重層的構造を、より立
体的に再構成しようとする際重要であるとの認識のもと、弘化・
嘉永期における甲斐国都留郡下吉田村下宮浅間社流鏑馬祭り争論
を素材として分析をすすめられ、以下のような指摘をされている。

従来村内で力をもっていた「神領百姓」(神社に与えられた十二
石八斗二升六合の除地の内、八石余は神主へ、残りの四石余が五
人の神領百姓に与えられていた)の没落に伴い、村政に関わる権
利を獲得して村役人となった者達が、流鏑馬に関わる権利をも獲
得しようとしたのが争論の原因であり、これに対し「神領百姓」
は、流鏑馬祭り執行の義務を根拠として自らの正当性を主張した。
また、「神領百姓」の退転があった場合には、その「一家」(擬制
的血縁関係に基づく同苗集団)がかわって取り計らう「仕来り」
があった、などである。

二は、近世において、農民金融のひとつとして質屋と並んで重
要な位置にあった頼母子講に関するものである。会津における本
格的な研究成果は現在のところ皆無に近いため、ここでは頼母子
講研究の基礎史料を提示したいとされて、第一節では、複数村に
跨る頼母子講を取り上げ、そのシステムの解明につとめられ、第
二節では、年貢勘定と頼母子講の関係について検討されている。

三は、富士山北麓を対象に、幕府の薬草政策や薬草調査が、人々

にどのように受け止められ、どのような影響を与えたのかを明ら
かにしようとした研究である。この地域は、幕府の薬草調査をきつ
かけに大きく動きはじめ、以下のような展開をみせる。

まず、薬草調査によって薬草の生育場所が確認されると、そこ
は御用の場所として、従来近隣村々が保持していた利益権は制限
されることとなり、当該地域の人々の生活・生産に障害を及ぼし
はじめる。そこへ、この、地域にとつて「迷惑」な存在であった
薬用御用の地を、上吉田村の御師田辺伊予が「薬園」とすること
を願い出て、一部の土地を薬園とすることを許可される。この薬
園は、伊予個人に許可されたもので、薬草の献上も伊予個人の責
任で行われており、上吉田村の関与は殆どなかった。ところが、
上吉田村は、薬園下賜証文中の誤記を利用して、全村の権利拡大
を企図し、この後、近隣村々との間で訴訟をくり返すこととなる。

四は、疱瘡や種痘の研究の中では、これまで殆ど取り上げられ
ることのなかった領主や民衆との関係に焦点をあて、さらに民俗
の領域にまで踏み込んで、疱瘡や種痘に対して持つ人々の心性に
迫ろうとした意欲的な研究である。

まず、第一節では、会津地域で確認できる種痘以外の疱瘡対策
——赤牛・疱瘡神・祈禱・庭火焚き・薬(赤牛の糞・カッコウ・土
龍・ヒキガエルなどを原料とするもの等)——をとりあげ、そこ
には、人々の願いと共に、領主による領民への薬の配布に見られる
ように、「御尊慮」による「御救」として、領主の権威を再確認さ
せようという志向性も見いだせるとされる。

第二節では、会津藩における種痘の普及についてとりあげ、その過程で、従来からあった民俗とどのようにかわっていくのかも検討され、以下のような指摘をされている。

①会津藩では嘉永三年（一八五〇）に種痘が開始され、種痘改、つまり種痘をしても発症しなかった者の調査が行われたり、藩内のみならず藩外の医師による接種が行われたことも確認出来る。

②種痘の普及を目的とした刊行物の中には、痘瘡に関する民俗を否定せず、種痘を民俗の延長線上に位置づけようとしたものもある。逆に、旧来の民俗との関わりを完全に捨象し、父母の愛に訴えて接種を勧めるものもあり、正しい種痘の接種方法を記したものもある。

③藩は、種痘改を行ったり、触書を出して種痘が良法であることを説き、接種を奨励したりして関与を深め、種痘を自らの管理下に置こうという志向性をみせた。

五は、戦乱の世に造られた城館の近世後期における状況を、文化六年（一八〇九）に完成した『新編会津風土記』によって検証したものである。

六は、福島県立博物館企画展図録『戊辰戦争といま』のために書かれたものである。ここでいう旧臣とは、戦国大名の家臣の末裔に当る百姓・町人を指すが、彼等は近世を通じて結束を維持し、戊辰戦争にも出陣したとのことである。

以上が本書の内容である。一読してまず感じるのは、著者の目が、常に、その地域その土地に住む、ごく普通の人達に注がれているということである。

書評と紹介

例えば、第一部の九「企画展「戊辰戦争といま」」では、「今日までの福島県内における戊辰戦争に関する研究は、著名な個人の顕彰が中心となっていたのではないだろうか。」「今回の企画展では地域や民衆に注目して、私たちの身近な地域での戦闘等とはどのようにおこなわれたのか、また、地域に生きていた人々と戊辰戦争との関わりを積極的に取り上げたいと思う。」といわれており、第二部の四「禿百姓と諸集団」では、百姓の生活・習慣等に密接に関わる諸集団の検出につとめ、それと惣百姓との関係を論じられており、また、五「肝煎と惣百姓」では、「肝煎役成立のためには、領主の公認や田畑の多さだけでなく、村内の集団とバランスのとれた関係にある自らの集団を持つ必要があった」として、百姓達から承認されることの意義をおさえておられる。

第三部の三「富士山北麓の薬園と山論」は、幕府の薬草政策を、その対象とされた地域の人々の側から見たものであり、五「会津藩における種痘の普及と民俗」では、「今回使用した種痘関係史料は、接種者が刊行したものであり、そこから被接種者の心性をよみとろうとした。」と、いわれるように、史料的にも困難の伴う中、庶民の心に迫ろうとつとめられていることがわかる。

さて、著者は、「オレは村のことをやる。」が口癖だったそうである。出来る事ならもう少し長生きして、右往左往しながらも志だけは著者と同じと自負している私達後輩を導いて頂きたかったと切に願わずにはいられない。心より御冥福をお祈り申し上げる。

（二〇〇七年七月刊 A5判 三二六頁 定価 二五〇〇円、酒井耕造著作集刊行会）